

「あの人」を問うこと

—— 大江健三郎 「みずから我が涙をぬぐいたまう日」 ——

服部訓和

「父よ、あなたはどこへ行くのか？」（『文学界』六八・一〇、以下「父よ」と略記）・「われらの狂気を生き延びる道を教えよ」〔新潮〕六九・二、以下「われらの」と略記）で大江は、戦争中土蔵にこもっていた「父」・「あの人」の記憶を「再現」しようとしながら果たせない男の物語を描き出した。続く「みずから我が涙をぬぐいたまう日」〔群像〕七一・一〇、以下「みずから」と略記）は、「自称癌患者の男」〔Ⅱ「かれ」〕が、敗戦時／少年時に「あの人」（父と天皇とを意味する語）と暮した「ハビイ・デイズ」の記憶を「口述筆記」しようとしながら、やはり果たせないまま終わる物語である。

「みずから」という小説は、如上、「父」・「天皇」の幻想が自壊していく物語の反復とみなしえることから、前年に生じた三島由紀夫の割腹自殺事件を契機として、天皇制（への自己）批判の試みが三度繰り返えされたものと解される傾向にある。たとえば渡辺広士は、「セヴンティーン」〔『文学界』六一・一〕以来の大江の天皇小説の系譜に「みずから」を位置づけ、「三島由紀夫と同じように（空をかけてゆく）夢の中の天皇に呪縛された経験」と「記憶」を持つ大江による「自己治療」の試み

と論じた。複雑な「みずから」の語りの構造それ自体に、大江自身の内部に存する「天皇」への「コンプレックス」を見出すものである。対して黒古一夫は、「みずから」を「反天皇小説」の系譜に位置づけ、抽象的で「具体性を欠いた『失敗作』」と評している。両氏の結論は逆であるが、天皇制批判のモチーフの基底に大江その人の戦争時の原体験を想定する点、同一の見地に立っている。

こうした読み方がなされてきた背景には、大江による自注——「われわれの想像力を縛る枷〔*天皇制〕を、かえって自分の手がかりにひきつけ、可能なかぎり、いちどは自分自身を、頭から足先まで、その枷でがんじがらめに縛りつけようとした」——の存在が想定できる。一篇の背後に三島への批評意識が強く存することも、同時期のエッセイや文庫版の著者解説において強調されており、従来の解釈は、かかる自注の枠組みと合致していると言える。たしかに「父よ」や「われらの」との主題的な連続性は明白である。原体験に起因しているかはともかく、大江の自注を看過できるわけでもない。だが、「みずから」という小説は、三島／天皇制批判の書としてしか読めな

いのであろうか。

「みずから」という小説を読み解く作業のなかで一篇に新たな相貌を見出していくこと、そして一篇を同時代的に意味づけしていくこと、それが本稿での課題となる。あらかじめ述べておけば、「父よ」や「われらの」執筆の後、「あの人」の記憶に縛られた男の物語が、屈折した語りによって描かれなければならなかった所以は、「世界的に反小説が流行っていたこと」や「天皇と死」の問題が日本人の「意識の暗いところ」に根ざしている「ことのみによって説明することはできない。そこには、一九七〇年前後の戦後日本の問題機制と緊密に結びついた意味を見出していくことができる。

第一節 批評性の問題

既に触れたように、「みずから」の批評性の要諦は、複雑な語りの構造に見出されてきた。渡辺広士は、一篇の語りの構造を、①地の文の審級と、②そのあいまに二重括弧で括られたかたちで挿入される文の審級とに腑分けする。①では、病床における「かれ」が、「ハッピー・デイズ」とその前後の記憶を一九七〇年の時点から回顧し、「遺言代執行人」（妻）に「口述筆記」させた内容が、「時代順不同の、「同時代史」稿」として提示される。②では、「口述筆記」を行う現場での出来事が語られる。もって氏は、①の語りに属する「かれ」の「あの人」への幻想に対し、②に属する妻や母親の言葉が、「かれ」の幻想を「裏から透視して意味剥奪」する点に一篇の批評性がある

のどとする。すなわち「あの人」へ同一化せんとする「かれ」にいったんは寄り添いながらも、母親の眼差しがそれを換骨奪胎する構図に、三島／天皇制への（自己反省的な）批評性が見出されるのである。いま、このように概括される批評性が「みずから」に存することに異義を唱えるつもりはない。しかしその上であらためて再考したいのは「あの人」に固執する「かれ」の企図である。

一篇の批評性の根拠となる①と②の語りについて、兼原丈和が「口述筆記の内側の言葉を虚構とし、外側の〈遺言代執行人〉や母親の言葉を事実としてとらえられるのではない」と指摘するように、両者の境界が必ずしも明瞭なものではないことにまずは留意したい。「2」の冒頭場面、①②の接点をなす箇所を引く。

かれのベッドの周囲にいるものたちのもうひとりも、
（ここからは看護婦と呼ぶことにしよう）[*中略]そこで
限定された「看護婦」という名詞で呼ばれることになった
ところの）
看護婦もいつていた。

ここで「かれ」は、異なる語りを二つながら把握しうる視点に立っている。また物語が進むにつれ、両者の内容上の連続性は次第に強くなっていくのであって、①②の差異は相対的なものでしかない。こうした視点に立つと「かれ」の語ろうとする「同時代史」は、必ずしも「口述筆記」の内容（①）のみを指

すものではなく、「いま」②をも含みこんだものとして見えてくる。したがって、①の幻想を②の言葉が打ち崩していく点に見出される三島・天皇制への批評性もあらかじめ保証されているわけではなく、相対化されざるをえない。むしろ「かれ」は批判者（母親）の存在を十分に意識して、自身の「同時代史」に導入しているとさえ考えられるのだ。

同様の事柄は、物語内容、とくに母親に即しても言える。そもそも「あの人」という言葉は、母親が長兄の遺骨をもって帰村した日から、母親が父親に対して用いた呼び方であった。「かれ」の「同時代史」という迂遠な試みも、「唯ひとりおれの現実のハビイ・デイズを傍観していた母親は、あいかわらず森の奥の谷間にこもって、もっぱら憎悪の高周波のみを、おれの内臓アンテナにおくつてくるのだ、考えてみれば、そのためにおれは癌になってしまったのだろう、それならばおれは、自分のハビイ・デイズをひとり暮すベッドの生活のうちに十全に記録しておかなければならぬ」と、発想されたものである。母親を想定しなければ「同時代史」はそもそもありえない。「かれ」の企図は、単に三島に擬されるべき「あの人」への単純な同一化とはまた別の地点に、つまり母親の批評的な眼差しを前提とした地点にこそ見定めていかなければならないのだ。

「口述筆記」という方法を用いる「かれ」は、三五歳の「小説家」でもある。「あの人」という「言葉」に執拗にこだわる「かれ」の行為に、いかなる意味を見出していくことができるか。次節では、「かれ」にとっての母親の「眼」の意味づけを再考し、「かれ」の企図を浮かび上がらせてみたい。

第二節 母親の「恐しい眼」

「同時代史」を「口述」するに際し、「かれ」は、「過去の細部のある一点を、はつきりとかびあがらせるために必要なら、現実の自分をどのようにも恣意的に改変するつもり」と宣言していた。したがって、「かれ」の「口述筆記」の現場が「癌病棟」であるのか「神経科」の「病棟」であるのか、真実は判然としなない。だが、それゆえにこそ、「かれ」が「過去」をいかに語るかを見ることで、「いま」の「かれ」の企図を照射していくことができる。

そこで留意したいのは、「かれ」が「同時代史」の記憶の基底に、「三歳のころの狂気に近づいた思い出」を据えていることである。

幼時のかれは、いま自分の掌が奇怪でよそよそしく、おそろしい「もの」であることに気がつき、その異様な「もの」をふりすてることもかなわず、身動きひとつできなくなつたところなのだ。かれは幼時のやわらかさのままたちまち蒼ざめ、みるみる窪んでくる眼窩の皮膚から微細なミルクのような汗を発し、白眼をむいている。

「もの」や「狂気」とは曖昧なようであるが、たとえば次の引用と対照すれば理解しやすいだろう。一九七〇年前後から、精神病理学に基づく文明批評を展開していた宮本忠雄が、「分

裂病」の症状を「言語危機としての（もの）体験」として説明した一文を引く。それは「かれ」の症状と端的に似ている。

もともと世界の事物は意味するもの（と意味されるもの）とが一体となって初めて一つの意味記号（signe）を構成し、自然の安定性をそなえることができるのだが、（もの）体験では、世界の事物はその非対象的相貌性が増強する結果として、（意味するもの）がはげしく突出して、（意味されるもの）との自然な結びつきを失ってしまふ。[*中略] 彼ら[*「分裂病」者]は（意味するもの）の肉薄に圧倒され、もしくは（意味されるもの）の包围に身をさらすしかなくなるのである。

この観点に従う限り、「かれ」の「発狂」体験は、幼いころ「かれ」が「自然」な「言葉」を喪失した体験であったことになる。この記憶は、「いま」の「かれ」の企図を測定していく上で重要である。以下見るように、「みずから」という小説は、「言葉」を喪失した者が、「あの人」という「言葉」を探求する過程を描き出した小説と読みうるからである。

もちろん、ここで精神病理学との直接的な影響関係を想定しようとはしていない。後述するように、「言葉」と「狂気」を結びつける観点は当時必ずしも珍しいものではない。また、ここで記号的な原理を追求することもしない。ただし、「かれ」の「いま」の企てが、「言葉」の喪失体験にかかわるものとして描き出されていることは作品内から言えるようだ。一篇にお

いて重要な役割を果たす母親の「恐しい眼」も、「言葉」の恣意性に対して意識的な「眼」として設定されているからである。母親の批評的な「眼」の本質は、「さる、高貴の方からいただいたなつめがある」という自慢話に対して、「それは柿の種でしょうが」、「サル公キイの方からいただくのなら」と、「語呂合わせ」で返したという挿話によって説明されていた。「言葉」の音の一致から、意味をすりかえる「語呂合わせ」の能手たる母親の「眼」は、すなわち「言葉」の恣意性に意識的な「眼」なのである。このとき重要なのは、「かれ」の「発狂」の記憶が、「かれが実は三歳の時に発狂しつとそのままなのであり、あの人死によってその狂気が昂進したのみだ、大切なことはかれが幼児のぶんざいでとつくに発狂してしまっていたことなのだ」という母親の主張を受け入れるかたちで「かれ」の記憶に植え付けられたものと強調されていたことである。「かれ」の「同時代史」は、「言葉」の喪失を出発点としており、また母親の「眼」を前提とするかたちで成立している点が確認される。

さて、かかる母親の「眼」が威力を発揮していくのは、高校在学時、自殺未遂を発見された時であった。「遺書」を見つけた母親は、「自殺しようとする高校生の意識がどれくらい甘つたるく嫌味で」、「いかに稚拙な誤字あて字を書くものかを容赦なく強調して示す」ために「いたるところに「原文ノママ」とつけくわえて配つたのだと言う。この体験を契機として、「かれ」は自身の自殺未遂が、「にせの自殺」に過ぎないと痛感するに至り、「あの人」への安易な幻想や陶酔を伴う同一化を周

到に禁じられてしまう。母親の「眼」は、「ほんとう」を求め
る「かれ」の安易な同一化、すなわち安易な「肉体」の放棄を
暴きたてる。それは、「肉体」を殺して済むような「自殺」な
ど「甘ったるく嫌味」な「にせ」に過ぎないことを絶えず暴露
するものとしてあつた。従来見出されてきたような母親の「眼」
の批評性はここに端を発する。

ただしここで想起すべきは母親の「恐しい眼」があくまで「か
れ」の「にせの自殺」をこそ禁じる「眼」として描かれている
点である。それは単に「かれ」を貶めるためではなく、「空虚」
を抱えたまま自殺騒ぎを起してしまう「かれ」を「生」につな
ぎとめるためのものではなかったか。

「かれ」が母親の「恐しい眼」の意味を明瞭に理解したのは、
大学在学中、次のような「英語の詩」にあらわれる「眼」と母
親の「眼」との重合に気づいた時であつた。

Eyes I dare not meet in dreams

In death's dream kingdom

繰りかえすことになるが、しかもその眼は、子供むきの
物語や絵にあらわれるところの、じつと動かず澄みわたつ
て凝然としている眼、底深い暗闇をたたえた眼というたぐ
いの「恐しい眼」とはちがつて、まったく猿のようにもヤ
ニ色の浅い光をやどし、チラチラとこちらをうかがう、真
の「恐しい眼」なのだった。

なぜ「チラチラ見る眼」こそが、「底深い暗闇をたたえた眼」

よりも「恐しい」のか。この詩句が、エリオット(一九二五)「う
つろなる人々」の第二連冒頭の詩句であることに留意したい。
大江の愛読する深瀬基寛「鑑賞世界名詩選 エリオット」
(五四・一〇筑摩書房)は、当該箇所を「死の夢幻の王国にあ
りて／夢にわれその凝視を恐る、眼」と訳し、次の如く解説す
る。

次に“death's other Kingdom”といふのは第二節の“in
death's dream kingdom”つまり生きながらの死の世界から
大文字によつて区別された絶対の死の世界である。

母親の「眼」は、「絶対の死の世界」と対比される「生きな
がらの死の世界」からの「眼」と重ねられている。それは何よ
り「かれ」を「生」につなぎとめる「眼」だったからこそ「恐
しい」のである。

そもそも、三歳の時の「発狂」の記憶を「かれ」に与えたの
は母親であつた。その意味で、「かれ」の行動を「言葉」に帰
結させたのはむしろ母親である。母親は、「かれ」を「あの人」
の呪縛から救うべく、またその苦しみが自殺に至らぬよう、三
歳の時に既に「発狂」していたのだとの記憶を与えて、たえず
「あの人」の記憶を相対化していたことになる。母親は、いつ
たんは「狂気」の枠組みを「かれ」に与えることで、「小説家」
として「言葉」を探求する生活のなかで、病を寛解させること
を期待していたのではなかったか。「かれ」を「小説家」に仕
立てたのは母親なのである。母親の「眼」は、単に「あの人」

の幻想を打ち崩すものとして機能しているのみならず、「いま」の「かれ」を強く規定するものとして描かれている。ここには、一篇の新たな相貌を見出ししていくための契機があるろう。

以上の事柄は、「いま」の「かれ」が、「にせの自殺」によってではなく、むしろ逆の力、「癌の生命力」を肯定することで「あの人」を再現しようとしていることから証拠立てられる。

「3」の末尾、「なぜ父親という言葉に置きかえてはいけないの？ あの人」というと神話か歴史のなかの、架空にちかい人物のように響くわ」という妻の問いに答えた、「かれ」の一連の台詞から三箇所続けて引く。

①おれの母親が、ある特別の日からあの人という呼び方に固執しはじめたのは、あの人を架空の人物におとしめてしまいたかったからかもしれないね。

②それでおれは時どき自分が、母親のいったとおり三歳の時から発狂しているのであって、いつか正気に戻れば、自分を悩ますあの人のお化けも消えさるのじゃないかと思ってみたほどだ。しかしいま、あらためておれは、よし、それでは一生、気狂いのままでいてあの人のお化けと共同生活をいとなみづけよう、と決心しているんだ、h a, h a、h a !

③ところで架空の人物めいて聞える、というのは、おとしめる意味でもあるのだから、ひとつの偶像のようにたかめる意味も持つのじゃないか？ [*①~③引用者]

①では、「あの人」という一語を用いた母親の企図が、固有名を剥奪し、「あの人」という多義的な意味を内包しうる呼称を採用することで、父親の存在の具体性を「架空」のものとする「言葉」に意識的な戦略と解釈されていることがわかる。②からは二つの事柄が読み取れる。まず「狂気」の枠組みを与える母親の教育方針が、「あの人」の幻想を「言葉」を喪失した者が見る「もの」に帰結させ、「あの人」の幻想をもまた消滅させようとするものであって、それが一定程度功を奏していたと（「かれ」によって）認められることである。「かれ」は、「あの人」への安易な同一化が「にせ」であることを熟知した「小説家」なのである。

だが「かれ」は、「発狂」の記憶を積極的に引き受け、「いっばいくわせることを切望」する方向に向かった。それが②から看取されるもう一点の事柄であろう。「いっばいくわせる」とは、母親の「眼」を振り切って「あの人」への同一化を図ることではない。「かれ」は「小説家」として、母親の与えた枠組みに基づき、「あの人」という「言葉」を見出そうとしている。「同時代史」の記憶に、「言葉」の喪失体験が据えられなければならぬのは、「同時代史」が、「言葉」の探求者の物語でなければならぬからである。③では、かかる「かれ」の戦術がほのめかされている。かつて母親は「あの人」という「言葉」によって父親の存在を「架空」のものとした。以下見るように、「かれ」は「いま」、母親の「眼」を逆手にとり、「あの人」という「言葉」に、新たな、特権的な意味を与えようとしている。

「八月に入ったあと「かれ」は恒常的に昂奮している。」口

述筆記」は停滞し始め、「かれ」は母親が「この夏の熱さ乗りこえることができるかどうか」ばかりを気にしている。それは「かれ」の「口述筆記」が何より母親の「眼」を必要としているからである。それゆえ、「かれ」の前に、母親が突如あらわれたことはむしろ僥倖であった。母親の助力によって、「かれ」の「口述筆記」は初めて「あの夏の日」の出来事に向かうことができる。

母親は「かれ」の記憶の細部をつぎつぎと否定していく。「かれ」によれば、「あの人」を「軍人」が迎えに来たのは「八月十五日以前」でなければならなかった。もし「八月十五日以前」でなければ、玉音放送を聞いた「ほんとうの」軍人が「あの人」を迎えにきて、皇居を爆撃するために「蹶起」したのだという。「かれ」の解釈の真実性に齟齬をきたしかねない。しかし母親は、「軍人が来たのは八月十五日」であり、「八月十六日朝に出かけ」たのだと言う。「軍人」の姿も、「かれ」の思い描くものとは異なり、「誰ひとり軍服を着てはいなかった」ことが、母親の教えによって明らかとなる。「かれ」の抱く「あの人」の幻想は、次第に根柢を奪われていく。

ただし、かかる母親の「眼」こそが、「かれ」の求めていたものであった。「かれ」が「あの人」の記憶に肉薄することができたのは、「あの蹶起の日がじつは八月十六日だったことをあらためて検討する」ことによってである。最終章において、「ほかならぬ癌の破壊的援助によって、「かれ」はこの二十五年間に、真の「かれ」の肉体に乗せられていた余分な肉をとりさり、一九四五年八月十六日午後三時の「かれ」の肉体にま

で、すでに縮小しているはず」だと予感した際の日付も、「八月十六日」である。「かれ」はあくまで母親の解釈を利用し、自身の記憶を修正することによって、次のような解釈をみずからのもとしていくことができる。

一九四五年八月十五日、天皇は人間の声でかたるところのものたるべく地上へ急降下した。その天皇が八月十六日、あらためて急旋回、急上昇をおこなおうとしていたのだ。いったんは爆死せざるをえないとしても、国体そのものとして、真によみがえり、かつてよりなお確実に、なお神的に、普遍的の菊として日本のすべての国土、すべての国民を覆う。

「八月十五日」の「急降下」と、「八月十六日」の「急上昇」。この解釈は、母親の「眼」の枠組みを借り、「あの人」を「ひとつの偶像のようにたかめ」ようとする「かれ」の屈折した企図に正確に呼応する。繰り返せば、「かれ」は「あの人」や「ほんとうの」軍人の幻想を否定されることそれ自体によって可能となる「言葉」を見出そうとしていた。かかる「かれ」の企図を単純に三島に擬すことはできない。

第三節 「一九七〇年」の言語実験

では、物語の現在、病床にあって「口述筆記」に励む「かれ」は、具体的にどのような事柄を実践しているのであろうか。以

下見るように、「いま」の「かれ」の描写も、一貫して、「狂氣」の言語体験を形象化したものと認められる。

「遺言代執行人」たる妻は、「かれ」が「癌病棟」ではなく、神経科の病棟に在ることを述べる人物の一人である。彼女は、「かれ」が固有名詞を使わないことに對し、「一般的な普通名詞、たとえば看護婦なら看護婦という名詞を採用するようにつとめてください」、「その努力をしなれば、ついにはあなたの発する言葉から、すべての普通名詞が消滅してしまうのじやないかと心配なの」との危懼を表明していた。ここには、「狂氣」を「言葉」と接続する知見が前提とされている。その点「かれ」自身も、「躁鬱的な精神病者には、言葉の語呂あわせや字謎に熱中するのがある」と述べていた。妻が、「かれ」が精神を病んでいることを疑い、医師と相談をとりながら、その病の根源を記録しているらしいことも作中の記述から窺える。もちろん、「かれ」の「肉体」の無数の「傷痕」に「自殺癖」を疑う医師の観点は、「肉体」に帰結する「かれ」の苦しみの言語表現を見る観点であろう。

病床における「いま」の「かれ」が行おうとする行為は、やはり「三歳」の時の「発狂」体験に端を発する言語体験として描き出されている。したがって、「発狂」体験を基底に据える「かれ」の「口述」作業はそのまま、「言葉」そのものを組上に載せていく。その限りで言えば、妻もまた「遺言代執行人」として「かれ」の企てに参加していることになる。妻は一篇の開始早々、「筆記」という作業について、「言葉」を裏切るが如き困難を感じていた。

あなたは どうして、自分が癌のために回復不可能であり、いまにも死にいたる昏睡状態が始まるのだと、実際の病状とまったく矛盾することを信じているような口述をするの？ いちいちそれを文字に置きかえてみると、書かれたものが事実として逆に紙の上につきだして、書きしるしている指を押しあげるような気がするわ、と「遺言代執行人」はいったものだった。

妻の「筆記」する「文字」と、「かれ」の「口述」する「音」「声」との共犯関係において、「かれ」の「肉体」の「魂」のエネルギーを賭けた「口述筆記」は、「あの人」という「言葉」を中核に据えた一箇の言語実験の様相を呈しているのである。

このとき重要となるのが、「かれ」が自身の「狂氣」の可能性を決して否定しないことである。先の宮本忠雄は、「音声と意味の乖離」現象はそれを統御する主体における「人称性の解体」をもたらし、「分裂病」に帰結すると述べていた。「かれ」という三人称を用いて自身を語ることからして、「かれ」が「人称性の解体」の危機の淵に意識的に身を置く存在であることは明らかなのだ。無数の「傷痕」をめぐる、「自殺癖」を疑われた「かれ」は、妻の「これまでも本当には自殺しようとしたことがなかったというわけなの？」との問いに對し、「h a, h a, h a!」という笑いを洩らしつつ、「いや、そのように単純化しないでくれ」と述べている。この奇妙な笑い声は、「蠅」のようにも小さいアルファベット活字が唇から、h a, h a,

ha! と尾をひいてもらえるようなかな音をひびかせている」笑い方だとされる。「言葉」そのものが解体しかけて、その寸前にかろうじて「アルファベット活字」を保っている笑い声は、「狂気」と「正気」の中間に位置する者にふさわしい。「かれ」は、「狂気」の可能性を除外せず、「言葉」と「もの」の結びつきがはずれる瞬間に身を置こうとしている。それが「かれ」の戦術の要諦である。

その瞬間とは、「狂気」と「正気」という対立物が、「肉体」において均衡する瞬間の謂いである。病床における「かれ」の企ては、「母親」の「憎悪の高周波」によつてもたらされた「癌」が自身の「肉体」の総量の半分に達する「コペルニクスの転回」の瞬間を求めることであつた。そしてその瞬間は、「バタイユの本から切り抜いた、麻薬によつて恍惚としつつ切り裂きの刑をうける中国人の写真」に重ねられている。そこでジョルジュ・バタイユにあたつてみれば、バタイユは、「中国人」の「像の激しさのなかに、無限の倒立的な価値」を見出したと言う。

突如として私に見えてきて、私を苦悶の中に閉じ込めてしまったもの——しかし、同時に、私をそこから解放してくれたもの——それは、神的な恍惚と極度の戦慄の嫌悪感を対置する完全な対立物の一致であつた。

このような、「肉体」において対立物が同一性をもつて現前する瞬間に、「かれ」は「狂気」と「正気」とを招来しようと

していた。確認すれば、「かれ」にとつて「狂気」とは、「言葉」の恣意性が露呈して、「もの」そのものに脅かされる体験である。とすれば病床での「かれ」の企ては、以下の二点に概括しうることになる。第一に、母親の「眼」の力を借りて「言葉」と意味の結びつきをはずすこと。第二に、「言葉」と意味とが乖離する瞬間をみずからの「肉体」にとどめること。「かれ」はこの二つを同時に行い、「あの人」という「言葉」と、従前の意味とのむすびつきを解体し、その瞬間に、自身が望む意味を「あの人」という「言葉」に与えようとしているのだと考えられる。では、かかる「かれ」の言語実験をどのように位置づければよいか。

「みずから」の物語内の時間は、「真夏の一日」から「二十五年」後、「一九七〇年七月一日午前二時」からと強調されていた。この「一九七〇年」という時期が、戦後日本において、戦後民主主義への疑義とともに、「言葉」の衰退現象とその回復の必要が語られていた時期でもある点に着目したい。

一九七〇年新年号の「中央公論」の特集は、「言語——根源的なものへの問い」であつた。構造主義言語学の流入を背景とした「言葉」への関心の高まりを示す事例は枚挙に暇がないが、ここでは、やはり宮本忠雄^[12]の発言を参照しておこう。氏は、一九七〇年前後の戦後日本について、「この数年来、日本でもことばの問題が広くインターディシプリナリーな関心をあつめている」とした上で、そこに「ことばが〈もの〉の意味を十全につたえる記号である以上、〈もの〉がこんにちのように激しく変化すれば、ことばと〈もの〉との間には多少とも亀裂が生

じて、ことばの道具的有効性がへつてしまふ」事態を見出して
いた。ここでは、時代の急激な変化を受けて、「ことば」が対
応しきれていない「日本なりの言語危機」が想定されている。

「言葉」を問うことは、一九七〇年前後、きわめて同時代的な
問題機制であった。「あの人」を問い、そして既成の「言葉」
が解体する瞬間に、「肉体」的な意味の充実した新たな「言葉」
を見出すこと。かかる言語実験の試みは、同時代においては、
戦後日本に対してどのような立場をとるか、またどのように生
きるかという問題と直結する切実なものとしてあつたと考えら
れるのだ。

さらに氏は、「全共闘が運動の挫折とともに沈黙の淵にしず
んだのは、かならずしもエネルギーの衰退によるだけでなく、
このようなことば喪失」に陥つたためではないかとも述べてい
る。ここでは、戦後民主主義へ異議を申し立てた学生運動とそ
の衰退がそれぞれ、旧来の価値を体現する「言葉」への違和の
表明と、自身の求める「言葉」を見つけられないことに対応さ
せられている。「言葉」の衰退現象を論じるに際し、学生運動
が例に挙げられていたことは偶然ではない。戦後日本において
噴出した諸弊害——沖繩問題・差別・天皇制——を制度の問題
とみなし、そこに「言葉」を結びつける観点は一九六八年頃か
ら看取され、殊に学生運動家たちに引き付けられたり意味づ
けられていたからだ。早く中村雄二郎は、パリ五月革命と日
本の学生運動の双方に際会した体験を軸に、パリでは「学生た
ちの不満の爆発、情念の噴出が、石の壁の上の断章風の落書」
となつて溢れ、「情念」が「言葉」を否定しつつも「言葉」に

立ち戻っていたこと、他方で、日本では「ヤクザ調の東大駒場
祭のポスター」を除き「壁の上の言葉」は見られず、「言葉な
き」状態において力と力でぶつかり合うという結果になってい
る」ことを述べていた。もつて「言葉」の回復が望まれる
と言うのである。一方で既成の「言葉」を解体する必要がある。
だがそれは「言葉」に回帰して、「言葉」そのものを「回復」
していかなければならない。一九七〇年前後、かかる言語実験
の必要性が求められていたのである。

一九七〇年前後は、公害への関心が急速に高まりを見せてい
た時期でもある。公害への関心は、狭義の科学的関心にとどま
るものではなく、高度経済成長、ひいては戦後日本の近代化の
帰結としても認知されていた。この時期の大江も公害や終末論
の流行する同時代社会への強い危惧を述べるエッセイを発表し
ているのだが、そこで焦点となるのも、戦後が遠く隔たつたこ
とに由来する「言葉」の衰退現象であつた。たとえば「死滅
する鯨とともに——わが70年」(「アサヒグラフ」七〇・一一／
二〇)で大江は、「言語」の衰退現象の象徴に憲法第一条の「象
徴」という言葉を掲げている。「戦後二十五年間」のあいだに、
「象徴」という「言葉」は意味の内実を欠いてしまい、いかよ
うにも操作しようになつたと言うのである。同時代の現状
を「言葉」が実質的意味を欠いてきたことによる人間疎外の状
況ととらえる以上、課題は、いかに「言葉」に意味を取り戻す
かという問題と表裏をなす。「主体を問われる時代」(「朝日新
聞夕刊」六九・一／八)では、「オブジェ」という草月流華道
が広めた新しい「日本語」が、現代が生み出した新たな怪物「原

子力潜水艦を形容する上で適切な語となつてゐること、そしてそうした「グロテスクなオブジェ」に対抗しうる「シユジュ」を作り出していかなければいけないことが主張されている。ここでは「シユジュ」という「言葉」を創出すること、時代に見合つた「主体」を立てることがアナロジカルに捉えられている。「戦後二十五年」を経た一九七〇年前後に、旧弊な「言葉」を解体しつつ、新たな、内実のある意味をもつた「言葉」を創出するための言語実験。「みずから」一篇は、かかる言語実験を行う行為それ自体の形象化を試み、戦後民主主義批判以後の民主主義（＝「言葉」）の可能性を探つたものとして位置づけることができる。

ただし、「みずから」の屈折した語りを理解するためには、もう少し、「言葉」をめぐる同時代の問題機制とのかかわりを確認する必要がある。ここでは、「言葉」の創出を願う大江と、「言葉なき」学生運動家との邂逅を問題にしておきたい。戦後日本と「言葉」の衰退とをアナロジカルに重ねる大江の眼差しは、「言葉」を拒否する学生運動家たちの出会いによつて屈折を余儀なくされたようである。

一九六九年八月十五日、大江は九段会館の壇上にあつた。八・一五記念国民集会におけるディスカッション「私と戦後民主主義」にパネラーとして参加するためである。会場では、一九七〇年安保闘争が盛り上がりを見せた時勢を反映して、「平和憲法のワケ外にいた沖繩」、「天皇制は部落差別と一体である」といった議論が飛び交い、「大江健三郎、答えろ！」との野次が飛んだ。森崎和江が紹介した炭鉱労務者の言葉、「言

葉をしゃべるお前らは死ぬ！」を受けてのものである。司会者に促されての大江の返答は「小説家としては、やはり自分の言葉はどういう機能をもつのか、それは本当に無意味かということは何度も考えるほかないと思う」と述べ、「民主主義の機能に即していえば、言論の自由にかかわつて」、「天皇制の問題」を考へていきたいと言ふのみであつた。「父よ」と「われらの」の執筆の後、みずからの語つてきた「言葉」について再審を迫られる事態に逢着したのである。

「沖繩」問題を戦後民主主義の欠陥と認知し、自身の枢要な課題に位置づけていた大江は、「言葉」を拒否する労務者・学生運動家の「沈黙」する「肉体」の方が、自身の「欠落」した「言葉」よりも雄弁な「言葉」であつたのだと受けとめる。そして、かかる「言葉」観に基づき、「小説家としては、やはり自分の言葉はどういう機能をもつのか」、「天皇制の問題」を問うと述べた大江の創作への決意は以下のように帰結する。

「*八・一五集会での声に対して」ぼくはあらためて、ぶざまな自分の全体を提示しつつ、いや自分は、いわゆる「戦後民主主義」の欠落している部分を埋めることを日々考えつつ、自分の仕事をしてゆく、と答えるほかに、ぼく自身にそのなかが充実しているという手ごたえのある言葉をもたないのである。

一方で、「ぶざまな自分の全体を提示」すること。またもう一方では、「自分」の「欠落している部分を埋め」ていくこと。

後者は換言すれば、「小説家」として「言葉」に「肉体」的な意味を与えていくことであろうが、この二つの対立する眼差しが結節するのが「みずから」における、「あの人」という「言葉」ではなかつただろうか。

折しも一九七〇年三月にはよど号ハイジャック事件が起こり、学生運動は退潮期に向かっている。そうしたなか、大江は学生運動（の衰退していく側面）と三島事件とを並列的に捉え、両者を、「言葉」の衰退現象に起因する「肉体」的な行動への短絡化として捉えていたと思しい。そこに大江の批評意識があることは間違いない。だがおそらく、「あの人」という「言葉」の「欠落」を照らし出す側面を重視し過ぎるべきではない。大江が、一面において、学生運動家たちにむしろ共感の視線を投げかけていたことを看過してはなるまい。「あの人」という「言葉」が解体され尽くそうとする瞬間に、新たな「言葉」を見出し、こうとする「かれ」の眼差しには、「ぶざまな自分の全体を提示」し尽くす行為によって、「言葉」の「欠落」を「埋め」ようとする眼差しがたしかに仮託されている。

第四節 「あの人」を問うことの両義性

「かれ」が最終的に垣間見る「あの人」は、以下のように形象化されていた。

すべての血が流れおちていまは暗い空隙にほかならぬかれの頭に、石段の上で待ちうけるものはすでにあの人かどう

かさだかでないが、さあ、もう一米、銃弾にくだかれた両掌を熱い地面にこすりつけて這いずれば、かれはそれが誰であれ、かれを確かに待つ者の膝もとにたどりついて、血を、そして涙をぬぐいとつてもらえるだろう。

ここで問題となるのは、「あの人」の形象が、「あの人かどうかさだかでない」ものと表現され、もはや「あの人」という言葉で呼ぶべきですらない何かとして説明されていることだろう。「かれ」はここで、「あの人」という「言葉」が解体された瞬間に迫ろうとしている。

ではこの、「かれ」を「石段の上で待ちうけるもの」、「あの人かどうかさだかでない」ものをどのように意味づけることができるか。それは「かれ」の眼差しと同様に、対立する二つの意味を帯びている。最後に、「かれ」が見出そうとした「あの人」の形象のなかに、「欠落」を提示する行為と「埋める」行為とにそれぞれ対応するような、両義的な意味を読み取って本稿を閉じたい。

第一に、そこには原子爆弾の影が含意されていると言える。先に参照した深瀬基寛『鑑賞世界名詩選 エリオット』から、やはり「うつろなる人々」を解説した文章の一節を引く。

次の二行は抽象的な二つの言葉の結びつきを四つに重ねて右の数字を要約した形であるが、しかしその抽象語の結び、方が哲学者のそれとどれだけ異なるものかを試験しようと思ふ読者は、この二行を読む前に、あの広島のとる銀行の

石段の上に最近まで残つてゐたといはれる原爆の人影を想ひ浮べてみるがいい。

「次の二行」とは、第一連にあつて「相貌なき形色なき陰麻痺せし力 動きなき身振」と訳される一節である。この一節は、深瀬論において、対立する語を重ねることでのみ現前される空虚を表現したものとみなされている。そしてその解説として接続されるのが、原子爆弾の閃光によって壁面に焼き付けられた「人影」の空虚であつた。「あの人」が射殺されたのも「銀行」の前であつたから、「石段の上で待ちうけるもの」とは、「絶対の死の世界」と言うべき空虚を表現したものと考へられる。母親や妻を巻き込んで、「あの人」の記憶を「高め」ようとする「かれ」の企てがかかる空虚に達着せざるをえないのであれば、そこには、従来論よりもさらに直接的な三島・天皇制への批評性を見出していくこともできるだろう。「ほんとう」の「あの人」を求める運動は、最終的に原子爆弾の陰を招来せざるをえないという意味においてである。「かれ」は、敗戦以来の自分自身の「欠落」を徹底的に描き出していると言へる。

だが第二に、「みずから」が深瀬基寛『鑑賞世界名詩選 エリオット』と緊密に結びついているとみなす限りで、「あの人かどうかさだかでない」ものには、「あの人」を問う行為の積極的な可能性もまた示唆されているとみなすべきである。深瀬論は、「うつろなる人々」を評して、「この詩にあらはれた救ひがたいと見える絶望感」は表面ニヒリズムの表現と考へら

れ」もしたが、「実は『荒地』において示された絶対否定の立場がここに行きつくところまで行きついたものといふべきで、それはまたやがて肯定への転回を約束するものなの」だとしている。そして、母親の「眼」の典拠と云うべき「眼」の表現について同書は次のように述べていた。

次に“death's other Kingdom”といふのは第二節の“*death's dream kingdom*”つまり生きながらの死の世界から大文字によつて区別された絶対の死の世界である。「ひたむきに張られた眼」は「かつと見開かれた」クルツの眼から連想される *spiritual vision* であらう。この「眼」は第二節以後様々な含みをもつてしばしば現はれ、最後にベアトリッチェの眼に象徴される「至福直観」*visio beatifica* の眼へと発展する。

「うつろなる人々」のなかの「恐ろしき眼」は、第一に、死後に地獄が待っているような生易しい「死」ではなく、空虚そのものしか待ち構えていないような「絶対の死の世界」(“*death's other Kingdom*”)からの「眼」として現れる。そしてその「眼」は、母親の「眼」に重ねうる「生きながらの死の世界」からの「眼」を経て、やがて「至福直観」の「眼」へと至るのだとされる。

とすれば、「かれ」に「生」を強いた母親の「眼」を介して「あの人」を問う「かれ」の行為もまた、「あの人」の記憶を安易な幻想に帰着させない「小説家」の営為である限りで、「肯

定への転回を約束」されたものとみなすべきではないだろうか。少なくとも、「あの人」が顕現するであろう「コペルニクスの転回」の瞬間は、同時に「あの人」の記憶が解体され尽くして、新たな「言葉」の顕現する「逆転」の瞬間でもありうるはずなのだ。「あの人」という「言葉」が解体され尽くした後には、いかなる意味を与えるかは「かれ」次第である。ここには、「あの人」という「言葉」を問う「かれ」に仮託された両義的な眼差し、自身の「欠落」を、「ぶざま」なまま提示する行為においてこそ「理め」ようとする眼差しを看取できる。

もちろん、「みずから」の物語は、「かれ」の夢想の場面から、二重括弧つきの、現実の場面に振り戻されて終わる。物語の末尾では、医師が「かれ」に実際の「病状」を告げようとするのだが、「かれ」はもはや誰の声にも耳をかさない。「かれ」の企図は、結局のところ、自壊せざるをえないということである。「かれ」が「あの人」かどうかさだかでない「言葉」を創出するには「あと一米」足りないのだ。しかし、「一米」足りないことこそが、三島に擬されるべき安易な「あの人」への同一化と、「かれ」の困難な「口述筆記」の試みとを分かつとも言える。特権的瞬間を招来するために「かれ」は幾度も冒頭場面に立ち戻り、「あの人」という「言葉」を問い続けなければならぬ。そしてその限りにおいて、「至福直観」の「眼」に至る可能性が保証されるのである。

* 「みずから」という小説は、一箇の「言葉」を問うことで戦後日本に生きる自身の主体を再審した小説であり、またその

問い自体を形象化した小説である。同時代の現実が刻々と変化していくなかでいかなる「言葉」を用いるか。その問いは大江にとつてきわめて切実なものであったと思しいが、それは大江一人のものではなく、「言葉」を「拒否」した学生運動家たちをはじめ、一九七〇年前後の現実に違和を感じた者たちの問いと重なりあうものであった。従来、三島・天皇制批判として読まれてきた「みずから」であるが、かかる批評性もまた、一九七〇年前後の「言葉」をめぐる問題機軸の枠組みのなかで精彩を放つ。

注

- (1) 渡辺広士「父を復元する想像力」(『群像』七三・三)。
- (2) 黒古一夫「天皇制—デモクラット大江健三郎の決意」(『社会文学』三・八九・七)。
- (3) 大江健三郎「二つの中篇をむすぶ作家のノート」(『みずから我が涙をぬぐいたまう日』七二・一〇講談社)。
- (4) 大江健三郎「著者から読者へ 少年の魂に刻印された……」(『みずから我が涙をぬぐいたまう日』九一・二講談社文芸文庫)。
- (5) 渡辺広士「(天皇) 神話の多義性」(『みずから我が涙をぬぐいたまう日』九一・二講談社文芸文庫)。
- (6) 前掲(注五)、渡辺広士「(天皇) 神話の多義性」。
- (7) 来原文和「(私) を書くこと—(戦後派文学) の継承—」(『大江健三郎論』九七・四・三二書房)。
- (8) 宮本忠雄「言語と妄想—精神分裂病の言語論的理解」(土居健郎編「分裂病の精神病理」七二・一一東京大学出版会)。
- (9) 連合赤軍事件の元兵士の救済を主題とする大江の連作短篇集「河馬に噛まれる」(八五・一二文藝春秋) では、深瀬訳『鑑賞世界名詩選

エリオット」が、元兵士に貸し与えられ、救済の契機となっている。連合赤軍事件とエリオットを関連させる観点は、後述する「みずから」の同時代性に照らして重要である。

(10) 宮本忠雄「日本語と言語危機」(『思想の科学』七三二—二二二)

(11) ジョルジュ・バタイユ(一九六一)、森本和夫訳「エロスの涙」(六四・七現代思潮社)。

(12) 前掲(注一〇)、宮本忠雄「日本語と言語危機」。

(13) 中村雄二郎「言葉が失われたとき——大学紛争における「暴力」の意味と無意味」(『朝日ジャーナル』六八・二二〇—二二二)。

(14) 「八・一五記念パネル討論「私と民主主義」」(『朝日ジャーナル』六九・八〇—三二) 参照。司会は石田郁夫、三橋修。報告は、大沢真一郎。パネラーは、新崎盛暉、大江健三郎、里中克彦、鈴木達夫、館野利治、野崎健美、針生一郎、土方鉄、森崎和江。

(15) 講演記録「言葉一九七〇——原理的な意味における再検討」(『エコノミスト』六九・一〇)において大江は、八・一五集会での労務者について「言葉を拒否しているどころか、逆に言葉のこけおどかしの使用などはしたことの無い人間」と定義し、「真に言葉の名にあたいする言葉をさがしもどめての沈黙であれば、それはいいかげん言葉よりも以上ものを提示しよう」と述べる。「戦士が沈黙する時……」(八・一五集会での「戦後民主主義」)、『毎日新聞夕刊』六九・一〇—二〇—三)では、「八・一五集会では、確かに戦士たちが語った」。「これらの発した言葉のうちの論理的な欠落、あいまいさと感じられたところのことは、かれら自身の肉体が行動をおこすことによって埋められる。」と言う。

(16) 前掲(注一五)、「戦士が沈黙する時……」。

(17) 前掲(注一五)、「戦士が沈黙する時……」では、『討論 三島由紀夫 VS. 東大全共闘——美と共同体と東大闘争』(六九・六新潮社)における「天皇制」と「言葉」をめぐるやりとりを言及して、「これはヘドだ、と考えた」と述べている。本文で参照した「死滅する鯨」ともに「わが70年」でも、三島事件の知らせを聞いた際、「赤軍派ハ

イ・ジャック事件のことを思い出していた」と述べていた。

【付記】「みずから我が涙をぬぐいたまう日」本文は、『大江健三郎全作品3(第II期)』(七七・一〇新潮社)による。引用文中の傍線、「*」、／は稿者による。

(はっとり くにかず 筑波大学大学院博士課程)

人文社会科学研究所 日本文学)